

第2節 香川県出土の石臼について

本書に収録した対象地域においては、7点の石臼（ここでは挽き臼のことを指す。）が出土していることが明らかになった。また、香川県下における近年の中・近世遺跡の大規模発掘調査により、同資料の出土例は増加傾向にあることを指摘することができる。

ところが、石臼は粉食文化の中核を担った道具であり、上記のとおり遺跡の発掘調査によても少なからず出土例をみることができるにもかかわらず、縄文時代の石皿、中・近世の擂鉢などに比べると、考古学の研究対象としての認識度は決して高いとは言えない状況であった。それは、同資料が出現時期において、既に完成された形態を示し、時代単位の変化が乏しかったことと、日本列島内部における地域の差異が小さいために、時代相を分析するためのメルクマールとすることが難しかったことに原因していることが考えられるのである。

しかしながら、大阪府阪南市内において石臼製造のための石切り場遺跡が発掘調査されるなどすることにより、原材料の採掘から、生産、流通、消費の関連性を明らかにできる可能性が強調され、考古学的な研究を推進する気運の高揚がみられ始めている。

そこで、本書において石臼の報告を行う機会に、現段階における香川県内の出土資料を集成することにより、それらを歴史的に位置付けるための作業を試みようとするものである。

なお、作業全般にわたり、同志社大学三輪茂雄教授より有益な御教示を受けることができたことを明記しておく。

1 出土石臼について

香川県において石臼は、管見に触れるができるものだけでも、16遺跡から60個体分が出土している。その内訳は丸亀郵便局下層遺跡と大浦浜遺跡？の各1個体を除いて、全て集落遺跡からの出土であり、土坑、溝状遺構、井戸跡等の居住遺構以外に投棄されたか、損壊品を構造物の部材として転用した状態で発見される例が多いことがわかる。

以下に特徴的な資料について詳解する。

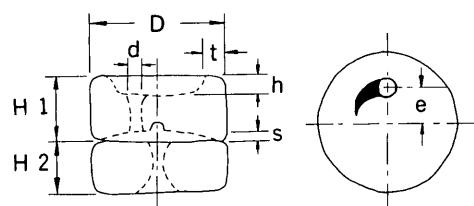
A 1

緻密な粒子の砂岩を原材料として製造されている。供給口が中心軸の位置に貫通しており、芯木の装着箇所を兼ねていることから茶臼であることがわかる。目のパターンは8分画で、1分画は主溝1本と副溝9本により構成されている。1分画中の主・副溝の数は、全資料中最多である。

形態的な特徴は、直径が小さいにもかかわらず、高さが大きい点であるが、その要因としては、茶臼の下臼の周囲には受皿が存在するために、上臼の直径が大きくなると、全体の直径も大きくせざるを得ず、腕を身体から離れた位置まで伸ばして回転させる必要が生じ、作業能率が低下することが考えられるのである。しかしながら、重量が極端に軽くなることは避ける必要があるため、高さを大きくすることにより、調整を行っていると考えられるのである。

A 2・A 4

両者は同一の遺構内部から採取された上に、作業面の直径とふくみの形態と大きさが等しいことから、組合せ可能な資



第524図 石臼計測位置基準図

第14表 香川県の出土石臼一覧表

単位：mm () は復元数値

番号	遺跡名	所在地	遺構名	所	時	期	直径	高さ	上縁	下縁	ふくみととくさ	分画×溝	供給口	石質	保存状態	特記事項	文献	
									t/h	t/h	s/e		$a \times b$					
A.1	杵田八丁遺跡	観音寺市杵田町	SE01	江戸	(192)	124	—	32	4	0	0	8 × 9	25	砂岩	1/4	上	1	
A.2	延命遺跡	豊中町上高野	SK04	13世紀後半～終末	(200)	(104)	—	23	9	28	0	—	—	(16)	凝灰角礫岩	1/4	上	2
A.3	"	"	"	"	(175)	92	—	25	14	8	0	—	—	—	凝灰角礫岩	1/4	上	"
A.4	"	"	"	"	(264)	—	88	—	—	—	—	—	—	—	凝灰角礫岩	1/4	下	"
A.5	"	"	"	"	(276)	44	—	40	32	—	—	—	—	—	凝灰角礫岩	上縁破片	上	"
A.6	"	"	"	"	(296)	60	—	24	8	16	—	—	—	—	—	1/4	上	"
A.7	"	"	"	"	(276)	—	98	—	—	—	—	—	—	—	凝灰角礫岩	1/2	下	"
A.8	中村遺跡	善通寺市中村町	E-SP19	室町中期	(300)	120	—	40	30	10	—	不明	40	凝灰岩	1/4	上	3	
A.9	"	"	不詳	"	(300)	94	—	45	15	10	—	8 × 3	(50)	凝灰岩	1/2	上	徳島産?	
A.10	五条遺跡	善通寺市原田町	敷石遺跡	中世	(300)	144	—	46	31	10	70	不明	55	凝灰岩	完存	上	4	
A.11	京免遺跡	普通寺市与北町・他	SK02	江戸以降	(200)	124	—	60	30	20	—	—	—	凝灰岩	1/4	上	5	
A.12	丸亀郵便局下宿遺跡	丸亀市大手町	石組み建物跡	19世紀以降	(400)	133	—	70	47	5	—	8 × 7	—	花崗岩	1/2	上	徳島産?	
A.13	郡家原遺跡	丸亀市郡家町	SK02	江戸以降	(302)	110	—	52	24	4	64	—	—	(46)	凝灰岩	1/2	上	7
A.14	"	"	SK03	"	"	268	120	—	48	(24)	4	64	—	—	38	凝灰岩	完存	上
A.15	"	"	SK18	"	"	(282)	110	—	44	24	15	—	—	—	(4)	凝灰岩	1/4	上
A.16	郡家林上遺跡	"	表面採集	不明	"	288	127	—	36	14	18	60	—	—	32	隕石	完存	上
A.17	"	"	"	"	"	(320)	105	—	0	0	0	20	—	—	—	隕石	1/4	上
A.18	"	"	SK07	江戸終末	(328)	—	125	—	—	—	—	—	—	(50)	隕石	1/4	下	"
A.19	郡家田代遺跡	"	S806	18世紀前半～中期	(144)	100	—	—	12	—	12	—	不明	—	凝灰角礫岩	1/2	上	9
A.20	"	"	SX03	"	(272)	100	—	36	16	0	72	—	不明	24	凝灰角礫岩	1/2	上	"
A.21	"	"	"	"	(136)	72	—	16	24	0	—	不明	—	凝灰角礫岩	1/3	上	"	
A.22	"	"	"	"	(120)	76	—	—	0	—	0	—	不明	凝灰角礫岩	1/4	上	"	
A.23	大浦港遺跡?	坂出市櫻石	不詳	300	152	—	32	20	64	—	不明	46 × 36	凝灰角礫岩	完存	上	10		
A.24	下川津遺跡	坂出市川津町	SDW01	16世紀	(408)	108	—	48	48	0	—	—	—	—	凝灰岩	1/4	上	11
A.25	木下遺跡	琴南町造田	遺物包含層	16世紀	(328)	87	—	—	—	—	6 × 4	—	—	—	凝灰角礫岩	完存	上	未報告
A.26	西村遺跡	綾南町陶	S25落ち込み	江戸	(270)	—	40	—	—	65	—	不明	—	—	花崗岩	1/2	下	12
A.27	"	"	M325E01	"	(132)	100	—	—	24	—	8 × 3	—	—	—	花崗岩	1/4	上	"
A.28	"	"	N235K01	"	(240)	103	—	20	24	18	—	不明	—	—	凝灰角礫岩	1/4	上	"
A.29	"	"	S24落ち込み4	"	(254)	58	—	—	40	—	—	不明	—	—	凝灰角礫岩	1/3	上	"
A.30	"	"	N24SD01	"	(260)	125	—	—	—	70	—	不明	—	—	凝灰角礫岩	1/2	上	"
A.31	"	"	S25落ち込み2	"	(255)	105	—	—	50	—	—	不明	—	—	凝灰角礫岩	1/2	上	"
A.32	"	"	S25SK43	"	(256)	132	—	28	20	5	60	—	—	32 × 28	凝灰角礫岩	3/4	上	"
A.33	"	"	N24SD01	"	(270)	50	—	—	—	63	—	不明	—	—	凝灰角礫岩	1/3	上	"
A.34	"	"	S25落ち込み3	"	(340)	75	—	20	30	5	—	不明	—	—	凝灰角礫岩	1/12	上	"
A.35	"	"	S25落ち込み3	"	(250)	80	—	18	15	9	—	不明	—	—	凝灰角礫岩	1/4	上	"
A.36	"	"	S25SD01	"	(270)	100	—	15	17	10	—	不明	—	—	凝灰角礫岩	上縁破片	上	"
A.37	"	"	"	"	(290)	165	—	30	28	0	—	不明	—	—	凝灰岩	1/4	上	"
A.38	"	"	S25落ち込み3	"	(290)	63	—	—	—	14	—	不明	—	—	凝灰角礫岩	1/4	上	"
A.39	"	"	S25落ち込み	"	(230)	95	—	18	21	2	—	不明	—	—	凝灰角礫岩	上縁破片	上	"
A.40	"	S25第3層	"	"	(250)	50	—	—	—	—	—	不明	—	—	凝灰岩	破片	上	"

番号	遺跡名稱	所在地	遺構名稱	時	直徑 D	高さ H1/H2	上縁 t/h	ふくろ入り口 s/e	分面×溝 a/b	供給口 d	石質	保存状態	特記事項	文献	
A41	西村遺跡	緑南町陶	S25落ち込み 5	江戸	(250)	88	—	—	25	—	不 明	—	凝灰角礫岩	1/4	
A42	〃	〃	S24ST08	〃	(250)	67	—	—	5	—	不 明	—	凝灰角礫岩	1/4	
A43	〃	〃	S24SD01	〃	(240)	35	—	—	—	—	不 明	—	凝灰角礫岩	礫片	
A44	〃	〃	N 5 SK01	〃	296	100	—	—	32	—	不 明	—	凝灰角礫岩	完存	
A45	〃	〃	〃	〃	300	104	—	—	40	—	不 明	—	凝灰角礫岩	完存	
A46	〃	〃	〃	〃	(200)	96	—	24	12	—	—	—	凝灰角礫岩	1/4	
A47	葵王寺遺跡	高松市鶴紙町	SD23	〃	(300)	71	—	0	24	0	—	—	(40) 塩基性凝灰角礫岩	1/2	
A48	東山崎・水田遺跡	高松市東山崎町	C 地区第1面 SE06	16世紀	(285)	—	81	—	—	0	—	—	(35) 塩基性角礫灰岩	1/2	
A49	〃	〃	D 地区第1面 SK25	16世紀終末～17世紀	(354)	85	—	20	28	8	40	—	—	塩基性凝灰角礫岩	1/4
A50	〃	〃	D 地区第1面 SD01下層	〃	(260)	63	—	—	12	—	—	—	塩基性凝灰角礫岩	1/5	
A51	〃	〃	E 地区第1面 SK08	16世紀前半～終末	306	118	—	55	30	0	60	—	36×20 塩基性凝灰角礫岩	完存	
A52	〃	〃	〃	〃	293	108	—	36	28	8	52	—	36×32 塩基性凝灰角礫岩	完存	
A53	〃	〃	E 第2面 SD05	〃	264	—	90	—	—	—	—	—	塩基性凝灰角礫岩	1/2	
A54	空港跡地遺跡	高松市林町	SDm02	不詳	(350)	95	—	38	40	—	—	—	塩基性凝灰角礫岩	1/8	
A55	〃	〃	SKc93	江戸	(280)	104	—	40	28	5	—	—	凝灰岩	1/4	
A56	〃	〃	SKc92	〃	(300)	85	—	—	—	—	—	—	凝灰岩	1/2	
A57	〃	〃	〃	〃	(330)	123	—	50	33	10	—	不 明	凝灰岩	1/2	
A58	〃	〃	〃	〃	(300)	62	—	—	20	—	不 明	—	凝灰岩	1/2	
A59	〃	〃	SEA05	室町後期	(320)	—	88	—	—	8 × 8	—	—	砂岩	1/3	
A60	〃	〃	SEA05	室町後期	(320)	—	—	—	—	—	—	—	砂岩	1/3	

(文献)

- 1 片桐孝浩「作田八丁遺跡」、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 石田遺跡・長砂古遺跡・作田八丁遺跡」, 1988年
- 2 片桐孝浩「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第8冊 延命遺跡」, 1990年
- 3 真鍋昌宏「中村遺跡」、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 中村遺跡・乾遺跡・上一坊遺跡」, 1987年
- 4 笹川龍一「五条遺跡調査資料」, 1983年
- 5 鎌崎 寛「一般国道319号善通寺・ハイバス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 京免遺跡」, 1988年
- 6 東 信男「丸龟御便局下層遺跡」、「香川県埋蔵文化財調査年報 平成3年度」, 1992年
- 7 真鍋昌宏・岡 紗憲・山下平重「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十三冊 郡家大林上遺跡」, 1993年
- 8 廣瀬常雄「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十七冊 郡家大林上遺跡」, 1995年
- 9 佐藤竜馬「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十四冊 郡家田代遺跡」, 1996年
- 10 大山真光・真鍋昌宏・他「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 V 大浦浜遺跡」, 1985年
- 11 藤好史郎・西村尋文・大久保徹「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 VI 下川津遺跡」, 1990年
- 12 廣瀬常雄・林 正弘・他「西村遺跡 III」, 1982年
- 13 廣瀬常雄・竹下和男・他「西村遺跡 II」, 1981年
- 14 廣瀬常雄「県道山崎町線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 正箱遺跡・桑王寺遺跡」, 1994年
- 15 森下友子・森本晋司・他「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 東山崎・水田遺跡」, 1992年

第15表 香川県の民具石臼一覧表

番号	資料名	所在地	直径D	高さH1/H2	上縁t/h	分画×溝 s/e	供給口d a×b	石質	保存状態	特記事項	文献			
B1	普通寺A	普通寺市郷土資料館	215	95 約90	32 18	約0 55	8 × 3	40 砂岩	完存	上下	豆腐用			
B2	" B	"	317	105 78	52 33	約0 75	8 × 4	36 砂岩	完存	上下	-			
B3	" C	"	277	138 122	33 29	約0 65	8 × 4	28 安山岩	完存	上下	-			
B4	託問A	託問町立民俗資料館	280	140 140	40 24	0 65	8 × 6	38 砂岩	完存	上下	-			
B5	" B	"	318	130 160	80 128	33 50	5 80	8 × 4 40	34(80) 凝灰岩	完存	上下	-		
B6	" C	"	336	160	50	26	5	8 × 4	40 花崗岩	完存	上下	-		
B7	内海A	小豆島民俗資料館	275	152 117	40 20	約0 約0	60 50	8 × 4 8 × 4	46 砂岩	完存	上下	-		
B8	" B	"	245	135 106	40 -	32 45	5 55	8 × 4 8 × 4	28 凝灰岩	完存	上下	-		
B9	" C	"	260	106	-	26	約0 約0	55 55	8 × 4 8 × 4	30 花崗岩	完存	上下	-	
B10	" E	"	243	132 280	113 105	43 82	20 40	約0 23	65 70	8 × 3 8 × 4	24 砂岩	完存	上下	-
B11	" F	"	280	105 168	139 137	45 100	28 40	0 0	65 65	8 × 4 8 × 3	42 花崗岩	完存	上下	-
B12	" G	"	277	168	139	45	28	0	65	8 × 4	44 花崗岩	完存	上下	-
B13	" H	"	266	137	100	40	28	0	65	8 × 3	30 花崗岩	完存	上下	-
B14	" I	"	277	152	108	47 14	14	0	60	8 × 4	43 花崗岩	完存	上下	-
B15	" J	"	235	140	120	40 19	19	0	60	8 × 3	34 花崗岩	完存	上下	-
B16	" K	"	260	130	110	40	25	0	75	8 × 3	30 花崗岩	完存	上下	-
B17	" L	"	277	155	-	40	17	0	70	8 × 4	30 花崗岩	完存	上下	-
B18	" M	"	273	98	85	45	20	約3	60	8 × 4	40 砂岩	完存	上下	徳島産
B19	" N	"	347	-	160	-	-	-	8 × 5	-	花崗岩	完存	上下	-
B20	" O	"	277	170	-	40	20	0	65	不 明	45 花崗岩	完存	上下	-
B21	" P	"	400	-	140	-	-	-	不 明	-	凝灰岩	完存	下	-
B22	大川町歴史民俗資料館		305	170	130	45	30	5	70	8 × 5	40 砂岩	完存	上下	-
B23	" B	"	215	118	140	40	20	0	55	8 × 3	30 花崗岩	完存	上下	豆腐用
B24	" C	"	300	105	-	50	32	5	60	上8×3 下8×4	35 砂岩	完存	上下	-
B25	観音寺A	観音寺市郷土資料館	330	115	105	55	25	0	85	不 明	50 凝灰岩	完存	上下	-
B26	" B	観音寺C	305	130	95	45	23	0	80	8 × 4 (小区分あり)	40 砂岩	完存	上下	-
B27	豊浜	豊浜町文化会館分館	307	150	120	50	30	5	90	8 × 4 砂岩	完存	上下	-	
B28	大野原	大野原町郷土民俗資料館	320	165	135	50	38	0	80	8 × 4	35 砂岩	完存	上下	-

料であると考えている。

特に、ふくみの最深部が28mmを測る点は、加工された製品の粒子が急な傾斜を与えなければ排出できないことに起因することが推測できるのであるが、A 4が受皿を有する形態であることに注目すると、液体状の加工品の製造のために使用されたことを想定することが適当であると考えることができよう。

A 5

上縁の高さが大きいことから、粒子が小さいか、液状の原料の加工を目的としていたことが推測できる。

A 6

相当期間の使用による作業面の消耗のために、直径に比して高さが小さい形態を示している。

A 7

ふくみの形態と大きさがA 6のそれと酷似していることから、両者がセット関係にあったことが推測できる。

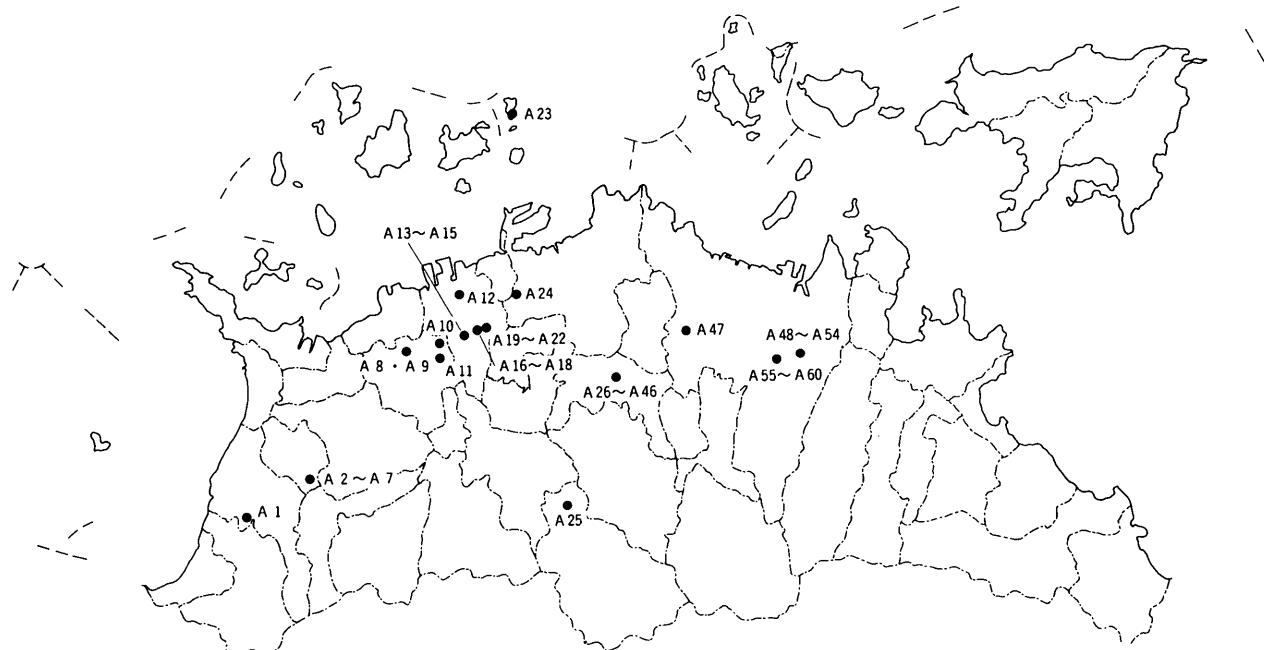
芯棒の装着孔の直径が極めて大きくなっている点については、長時間の使用により内面が磨耗したためであると考えられる。

A 8

完全に芯棒の装着孔の位置で破損していることから、廃棄時において人為的に2分割された可能性が考えられる。

A 10

自然石を集積した不定形な土坑から採取された上臼であり、ほぼ原形を留めている。遺構の性格については判然としないが、採取された遺物が本資料のみであることから、通常の生活廃棄物の廃棄坑として機能したことは想定し難い。したがって、非日常的な精神生活に関連した遺構であると考えることができよう。なお、平成6年度に調査された丸亀市平池南遺跡においては、「ウシ塚」と呼称される石組



第525図 香川県の出土石臼分布図

みの遺構から石臼 1 点が出土しており、石臼が信仰の対象となり得ることを示唆するものであることから、本資料の意義を考察する上において参考にできると考えている。

A 12

白色系の緻密な花崗岩を素材とした、精緻な資料である。特に、復元直径が約400mmである点から、人力によって回転することができる大きさとしては最大限度に近い値であることがわかる。

目は若干曲線状を呈しているが、整然とした配列を示していないことから、当初には直線であったものが、「目たて」を繰り返すことにより、曲線化したことが推測できるのである。

A 13・A 14

ほとんどふくみを有しない形態を呈することから、粒子が細かい原料の加工に使用されていたことを推察することができる。

A 23

上面に対して、作業面が傾斜する形態である点については、使用者の癖により一部分に変形が生じた結果であると考えられる。したがって、ふくみの約半分が磨耗のために遺存していない。

A 24

作業面に 2 条の溝が施されているが、これらを目の主溝と判断するならば、両溝が形成する角度が約 30° となる。ところが、この角度を根拠とすると主溝の数が 12 条程度存在する必要が生じるのである。したがって、現在確認されている全ての資料について、8 分画が最大であることから、容易に主溝の断定を下すことは避ける必要が考えられる。

A 44

ふくみと考えられる凹面部分に、溝状に成形された痕跡が確認できることから、同部分を作業面とする上臼であると推測することができる。ところが、上面に相当する部位に上縁と原料の供給口が存在しないことと、芯棒の装着孔が上面まで貫通している事実については、上記の推測を再考する余地があることを示唆する。

A 45

A 44 同様、上下の方向が判然としない資料である。全体の厚さが一定していないことから、使用者の癖により、一部分が集中的に損耗したことがわかる。

A 49

上縁の内側部分に縦方向の加工痕が認められる。

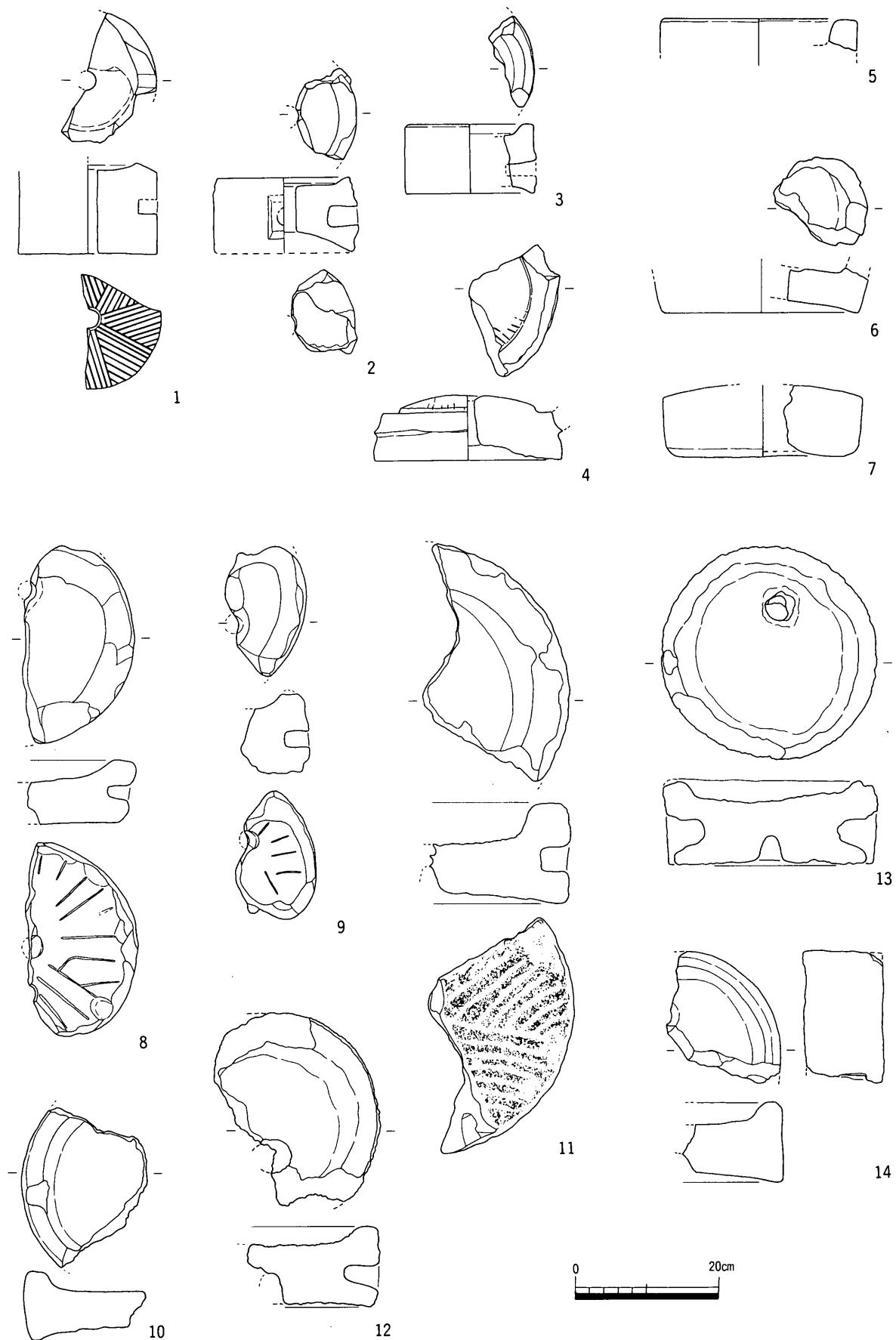
A 51・A 52

ともに上面に対して作業面が傾斜する形態であり、供給口に近い円周部分が最も磨耗している事実から、時計回りの方向に回転したときに、挽き木が正面手前から約 4 分の 1 周した時点において、正面手前部分に最も大きい加重がかったことが推測できる。

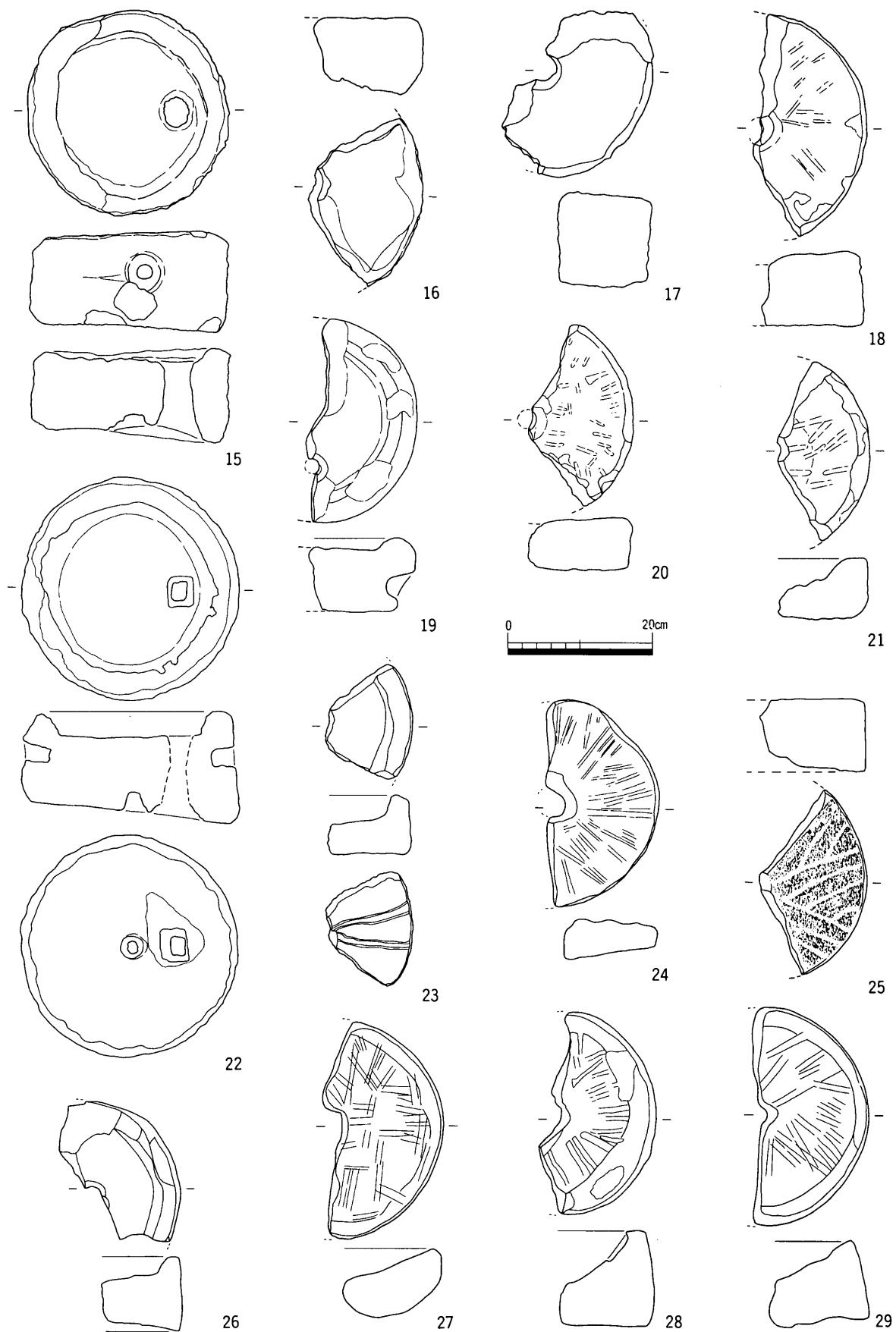
なお、A 51 は上縁内面部分に縦方向の加工痕を観察することができる。

2 民具石臼について

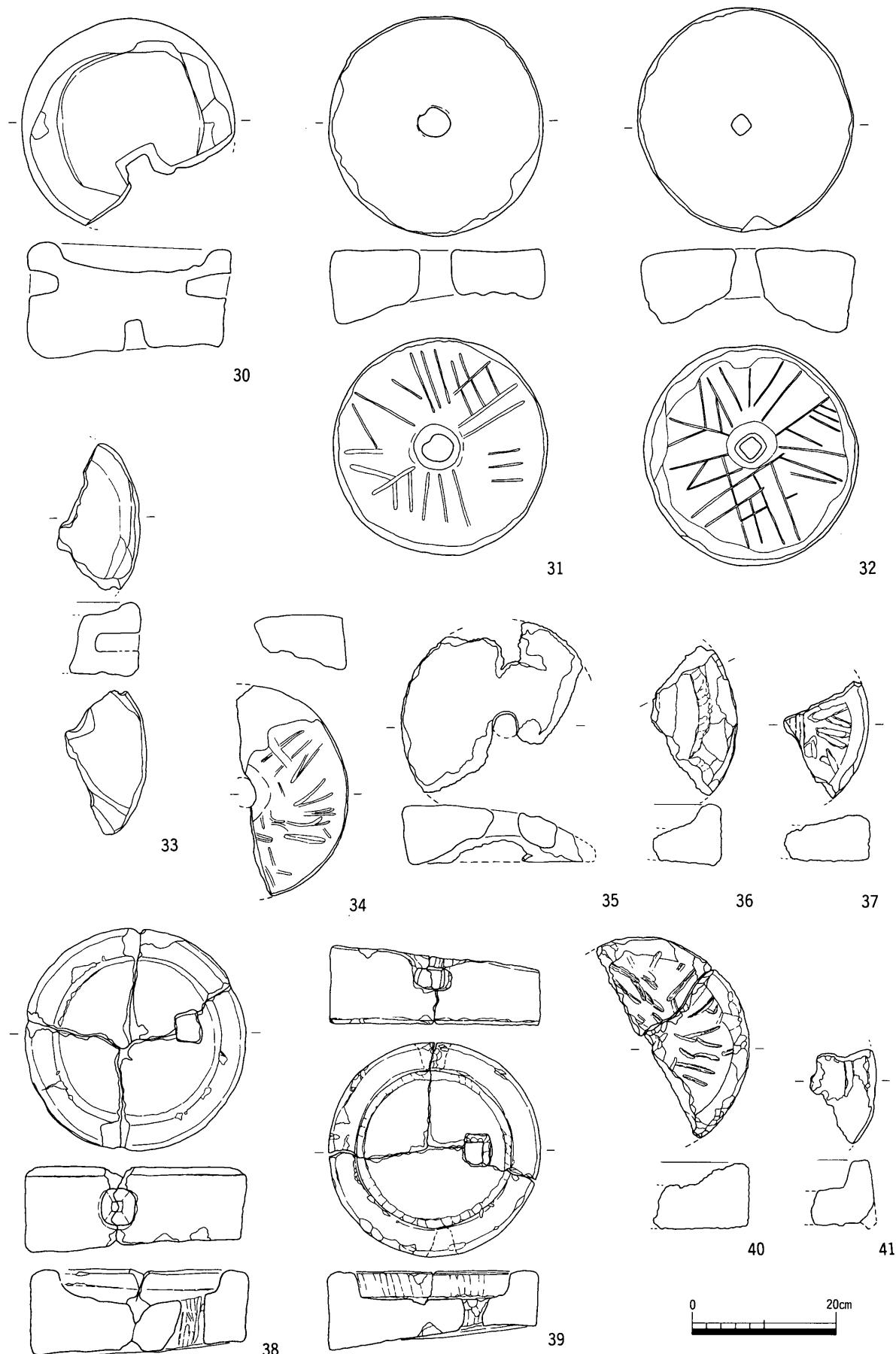
石臼は近年まで日常生活における必需品であったことから、民具資料は香川県内だけでも無限大に近い数が存在することができる。しかしながら、限られた時間の中でそれらの全てを観察することは不可能であるために、県下の文化財収蔵機関に保管されている資料についての情報の蒐集を行



第526図 出土石臼実測図(1) (10は掲載文献から複製)



第527図 出土石臼実測図(2) (23, 26は掲載文献から複製)



第528図 出土石臼実測図(3)

うことにより、考古資料との比較作業を進めることにする。

B 1

下臼の周囲に受皿を有する形態であり、その存在のために本体の直径が小さくなっている。受皿は液体状の加工品の製造のためには不可欠であると考えることができるが、伝承によても豆腐製造のために使用されたことを知り得た。

B 2

目が曲線状を示す点については、「目たて」技術が未熟であったか、あるいは資料の製造地が徳島県祖谷地方であることを示唆するものである。ただし、原材料の石材は砂岩であり、製造地を特定することは困難である。

B 3

ものくぼりが円周の約2分の1に相当する距離まで施されている点が特筆できる。

B 4・B 5・B 6

詫間町立民俗資料館において現在も使用されている資料である。小・中学生の体験学習用にきな粉の加工が行われているが、本来の使用目的については明らかではない。

B 8

下臼に受皿と注口を有することから液体状の加工品の製造のために使用されていたことが考えられる。

B 18

目が曲線状を呈することは明らかであり、原材料の石材に吉野川周辺から産出するいわゆる和泉砂岩が用いられていることから、徳島県祖谷地方において製造されたことが推測できる。

B 23・B 24

ともにものくぼりが全周する点が特徴である。

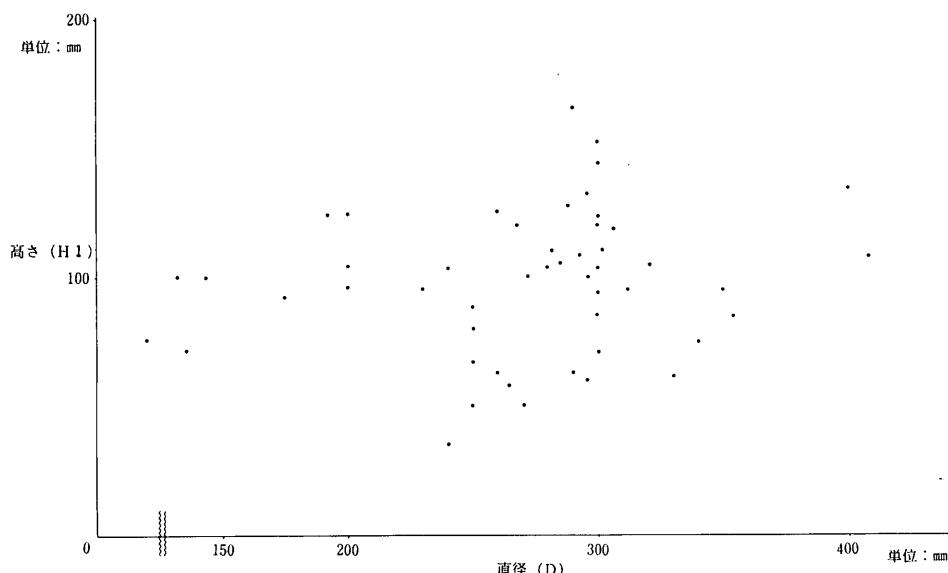
3 問題点と考察

香川県における出土石臼と民具石臼の比較作業を行った結果、以下の事実と問題点が明らかになったことから、今後の課題解決作業のための若干の見通しを立てることにする。

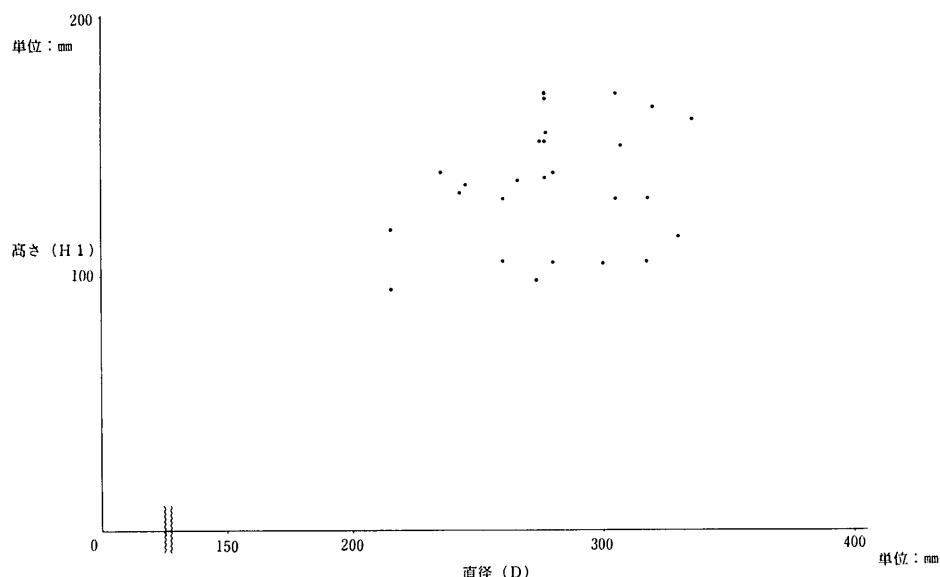
(1) 石材について

考古資料の石材は江戸時代までは凝灰岩が限定的に用いられており、同時代以降にその他の石材の利用が開始される。ところが、民具資料の石材については花崗岩と砂岩が主な原材料であり、凝灰岩の比率は小さくなっている。この要因としては凝灰岩が脆弱な石質であるために石臼の素材としては必ずしも適当でないにもかかわらず、容易に加工することができることから、技術が未熟な段階においても、生産が可能であったためであると考えることができる。そして、江戸時代以降の技術の向上に伴い、硬質な原材料の使用が開始されることにより、凝灰岩の使用が停滞したことが推測できるのである。

ところで、凝灰岩の中でも凝灰角礫岩と呼称される石材の利用頻度が高いことがわかるが、同石材は通称「豊島（てしま）石」と呼称されるように、小豆島西方の島嶼部を中心とする地域において産出されることが知られている。したがって、同石材を利用した製品の分布についても同地域に濃密に認められることが期待されたのであるが、小豆郡における民具資料の調査結果からはその出現頻度は極めて低いことが判明している。



第529図 上臼の高さと直径の関係グラフ (出土石臼)



第530図 上臼の高さと直径の関係グラフ (民具石臼)

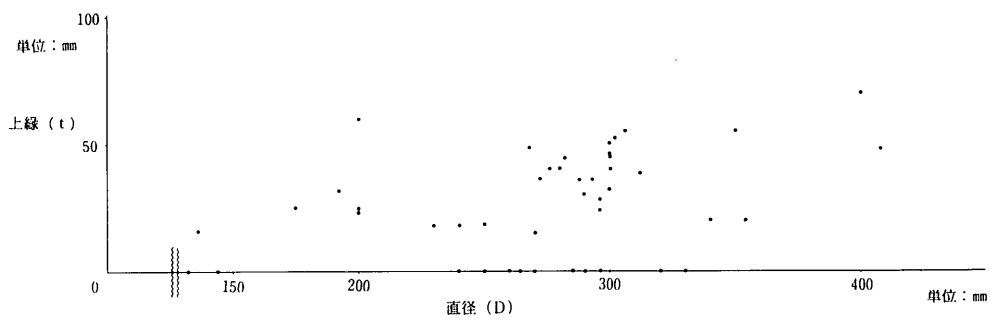
(2) 資料の大きさについて

蒐集できた考古資料の大部分は上臼であるために、民具資料の上臼と比較すると、ともに直径が300mm前後の数値に集中することがわかる。ところが、高さについては考古資料が100mm、民具資料が150mm前後の数値を示すことから、前者が扁平な形態であると言えよう。この事実について、各資料の耐久性に大差がないことを想定し得るならば、江戸時代以前の資料は上臼を薄く製造することが主流であったと考えることができるのである。

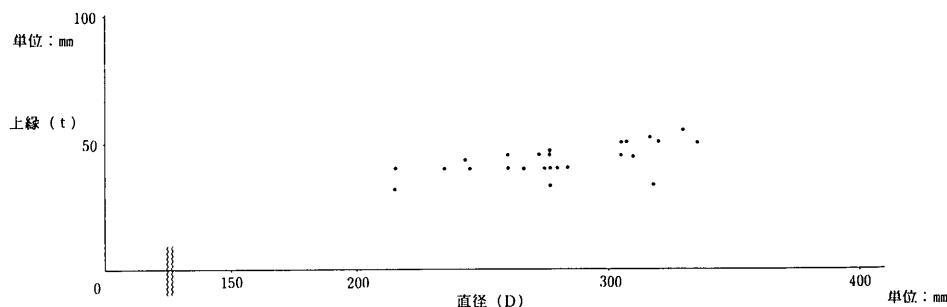
(3) 形態について

石臼に関する研究が不活発な原因として、形態上の時代相と地域相が顕著でないことを指摘し得る点については冒頭において記述したとおりである。しかしながら、詳細な観察を行った結果、形態面における差異が少なからず露見したことから、その原因について検討を加えたい。

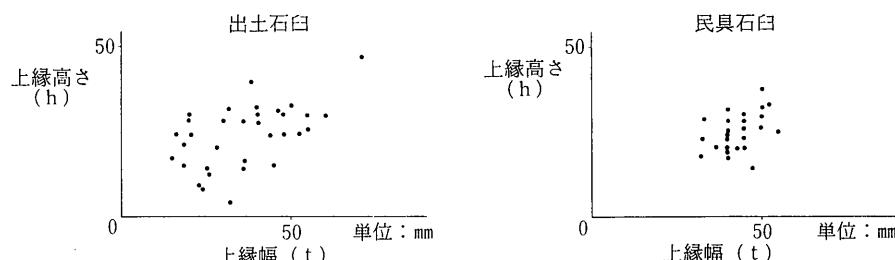
それは考古資料の上縁部に形態差が顕著である点である。すなわち、第533図にみるように、上縁部



第531図 上臼上縁部の高さと直径の関係グラフ (出土石臼)



第532図 上臼上縁部の高さと直径の関係グラフ (民具石臼)



第533図 上臼上縁部の高さと幅の関係グラフ

の高さと幅の比率は民具資料においては一定の領域内に集中する状態が認められるのに対して、考古資料においては、分散する傾向がみられるのである。このことは、近世までの石臼の製造に際しては、製作者の個人差、あるいは用途に対応した形態差が明確であったのに対して、近代以降においては、一定のモデルが設定されていた可能性があることを示唆すると考えている。